

埋蔵文化財ニュースを更新しました！

南陽市内で調査が行われた遺跡について、わかりやすく紹介する「埋蔵文化財ニュース」です。

遺跡が身近にあるということ、その遺跡がどのようなものであるかを知っていただき、郷土の歴史に興味を持っていただければ幸いです。

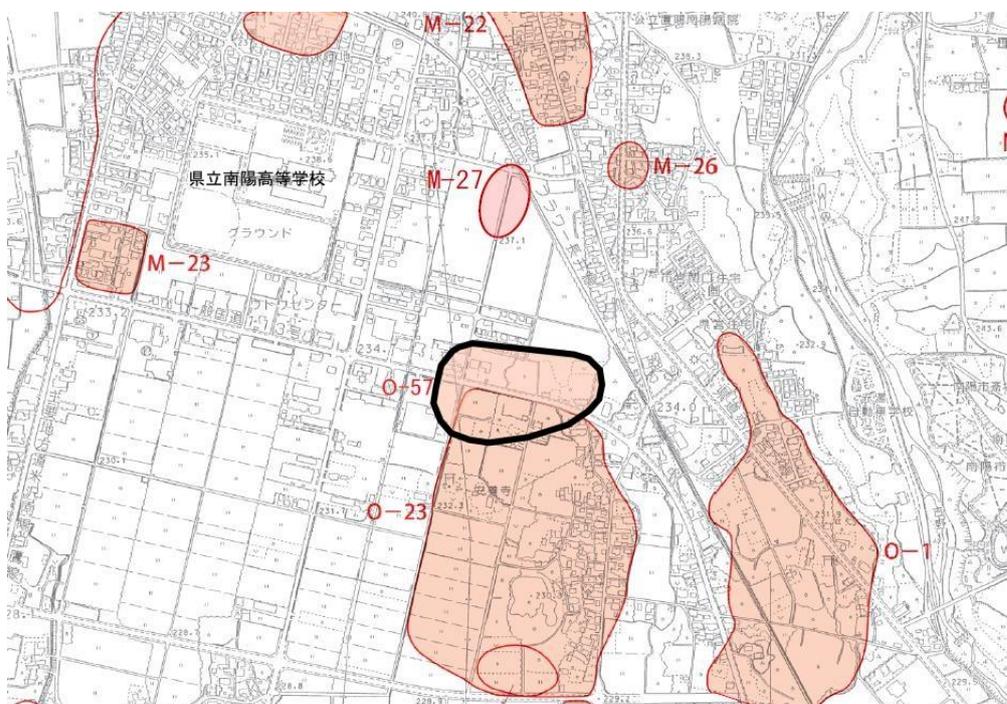
「埋蔵文化財ニュース」は、年数回更新を行い市内の遺跡を紹介します。基礎的な用語についても随時解説しますので、ぜひご一読ください。

(※右側にバックナンバー (PDF) もありますので、あわせてご覧ください。)

今回は、「清水上遺跡 (しみずがみいせき)」をご紹介します。

### ◎遺跡の場所と調査経過

「清水上遺跡」は、J R赤湯駅から北西約2 kmの地点の国道399号沿いに位置する遺跡です。南には中世の遺跡「蒲生田館跡 (かもうだたてあと)」があります。民間店舗建設に伴い実施した平成25～26年度調査の結果、古墳時代から平安時代の遺構・遺物 (※1)が確認されました。今回の「埋蔵文化財ニュース」では、この平成26年度の調査成果を中心に紹介させていただきます。



※中央の黒枠 O-57 の範囲が「清水上遺跡」(南陽市遺跡地図より)

## ◎平成 26 年度調査の概要

調査区は東西約 35 m×南北 30 m、1,050 m<sup>2</sup>の範囲で、以前は水田として利用されていました。民間店舗建設をきっかけに平成 25 年度に実施した周辺踏査及び試掘調査により、遺構・遺物が確認されたことから、翌平成 26 年度により詳細な発掘調査を実施しました。この調査により見つかった遺構は、[方形周溝（※2）](#) 2 基、[竪穴住居跡（※3）](#) 6 棟、[掘立柱建物跡（※4）](#) 14 棟、道路側溝とみられる溝跡 2 本などです。この遺跡は、調査面積に対し遺構の密度が非常に高いことが特徴です。竪穴住居跡の一部では、カマドや煙道の痕跡が確認されており、[須恵器（※5）](#) や [土師器（※6）](#) などの土器が出土しました。

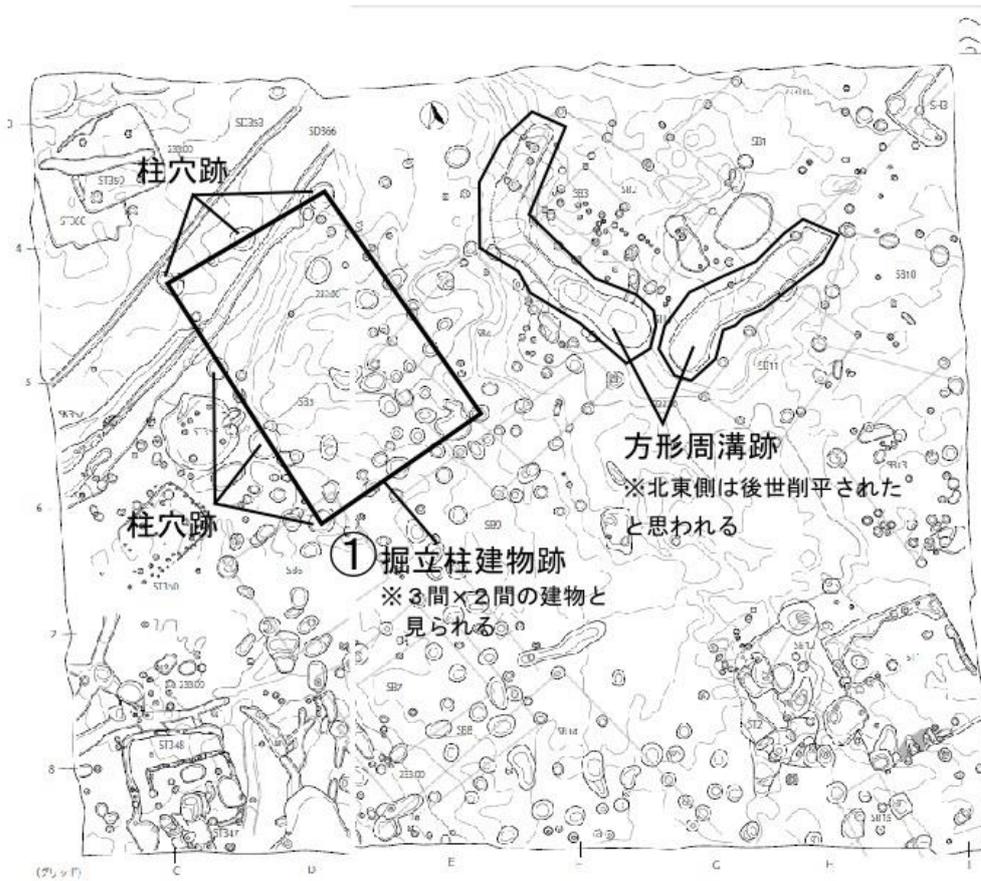


※遺跡上空から（写真中央が調査区、左下から右中央に走る道路が国道 399 号）

※完掘状況（写真左中央から手前に延びる溝状遺構は道路の側溝の可能性はある）



※遺跡上空から完掘状況（円形の穴は主に建物の柱跡を検出したもの）



※遺構平面図（発掘した柱跡や方形周溝跡等を記録したもの）

遺構全てが同時代のものではなく、時代差があることがわかっている。

※上の遺構平面図から奈良・平安時代の建物等（掘立柱建物・竪穴住居・道路）を復元したイメージ図

### ◎主な出土遺物

※竪穴住居跡（カマド跡）から出土した土器



ST1カマド一括出土遺物  
巻頭写真1

※同じ竪穴住居跡から出土した土器（接合・一部復元）

### ◎「清水上遺跡」はどんな遺跡か？

①「清水上遺跡」のあった時代は、出土した土器や遺構等から、「古墳時代前期の周溝跡」と「8世紀後半から9世紀末の集落跡」の大きく2つの時代に分けることができます。

②①の「古墳時代前期の周溝跡」は、見つかった方形の周溝が「[方形周溝墓](#)」もしくは「[方墳](#)」(※7)の可能性があり、出土した土器も「[供献的土器](#)」(※8)が多くみられ、「墓」があった可能性が考えられます。しかしながら、後世の削平が著しく断定はできませんし

た。

③①の「8世紀後半から9世紀末の集落跡」は、出土した土器は8世紀後半（奈良時代）～9世紀末（平安時代）のものに見られ、竪穴住居と掘立柱建物が混在している集落だったようです。市内の遺跡で同時期の「[中落合遺跡（※9）](#)」では、計画的な建物配置や板塀での区画など[官衙的遺跡（※10）](#)の特徴が見られますが、「清水上遺跡」ではこれらの特徴が確認されていないことから官衙的遺跡の可能性は低いと思われます。

④調査現場のすぐ近くに[法相宗（※11）](#)の「[古庵（※12）](#)」があったとの伝承があり、そのことを伺わせるような遺物（[耳皿・稜椀・墨書土器・転用硯（※13）](#)など）も出土しました。

#### <遺跡までのアクセス>

「JR 赤湯駅」から北西へ約2 km で徒歩約25分。蒲生田地区と宮内地区の境界付近に広がる遺跡で、蒲生田地区「安養寺」から北に約150m付近が遺跡の南端にあたります。外見上、遺跡とわかる状況ではありません。空き地であっても無断立入等は絶対にしないでください。

#### 用語説明

埋蔵文化財	土地に埋蔵されている文化財のこと。具体的には、貝塚・集落跡・古墳・城跡などの遺構と、土器・石器・木製品・金属製品など遺物を指す。
遺跡	文化財が埋蔵されている土地のこと。埋蔵文化財包蔵地。
古墳	3世紀後半から約400年の間に作られた土を盛り上げた墳丘をもつお墓。
前方後円墳	丸い古墳（円墳 えんぷん）と四角い古墳（方墳 ほうふん）をつなげたような形状をした古墳。
遺構・遺物（※1） （いこう・いぶつ）	遺構は、過去の人間が残した建物跡や柱穴等の動かすことができないものの総称。遺物は、過去の人間が残した土器や石器等の動かすことができるものの総称。
方形周溝（※2） （ほうけいしゅうこう）	方形や長方形の溝で周囲が区画されている遺構。
竪穴住居跡（※3） （たてあなじゅうきょあと）	地面を掘り、円形や方形の床を作りその上に屋根を作った半地下式の住居。旧石器時代から中世まで作られた。
掘立柱建物跡（※4） （ほったてばしらたてもものあと）	半地下式の竪穴住居に対して、地上式の建物。縄文時代では倉庫や神殿などの限られた用途の施設として作られたが、徐々に住居として普及し平安時代終わりころには全国に広まった。

須恵器（※5）（すえき）	古墳時代中期（5世紀）以降、朝鮮半島から製作技術が伝わり、生産が始まったとされる。窯を使用して高温で焼かれ、青灰色で硬い特徴を持つ。
土師器（※6）（はじき）	弥生土器同様に野焼きで焼かれた茶褐色で須恵器より軟らかい器。
「方形周溝墓」もしくは「方墳」（※7） （ほうけいしゅうこうぼ、ほうふん）	前者は、方形や長方形の溝で周囲を区画した墓。弥生時代から古墳時代前期に見られ、古墳と異なり盛土はほとんどされない。後者は、古墳の形のひとつで、上から見た平面形が正方形や長方形の墳丘を持ち、古墳時代前半に作られ始め7世紀頃まで続く。
供献的土器（※8） （きょうけんてきどき）	神仏や祖先、死者へのささげものをそなえるための土器。
中落合遺跡（※9） （なかおちあいせき）	中落合字前田付近。主に古墳・奈良・平安時代の遺跡。計画的に配置されたとみられる区画施設跡等が確認された。古代郡衙との関連が想定される。
官衙的遺跡（※10） （かंगाてきいせき）	古代日本における役所やそれに付随する遺跡をさす。
法相宗（※11）（ほっそうしゅう）	7世紀半ばに日本に伝わったとされる仏教の一宗派。奈良の薬師寺や興福寺、京都の清水寺などがある。
古庵（※12）（こあん）	僧や尼などが住む小さな住居、質素な小屋を指す。
耳皿・稜椀・墨書土器・転用硯（※13）（みみさら・りょうわん・ぼくしょどき・てんけん）	「耳皿」は、箸置きで供養具の一つと考えられる。「稜椀」は、仏具として利用された金属製の椀を須恵器で模したもの。「墨書土器」は、土師器や須恵器に墨で文字等を記したもの。「転用硯」は、甕や食器などを硯に転用したもの。

【更新日 令和4年2月1日】